$$-H=A\log_2 A+B\log_2 B$$

$$=\frac{1}{f_1\sim f_2}[(f_2\sim 1)\sim\sqrt{(f_1-1)(f_2-1)}]$$

$$\times\log_2\frac{(f_2\sim 1)\sim\sqrt{(f_1-1)(f_2-1)}}{f_1\sim f_2}$$

$$+\frac{1}{f_1\sim f_2}[(f_1\sim 1)\sim\sqrt{(f_1-1)(f_2-1)}]$$

$$\times\log_2\frac{(f_1\sim 1)\sim\sqrt{(f_1-1)(f_2-1)}}{f_1\sim f_2}$$

$$=\frac{\sqrt{f_1\sim 1}\sim\sqrt{f_2\sim 1}}{f_1\sim f_2}\Big[[\sqrt{f_1\sim 1}+\sqrt{f_2\sim 1}]$$

$$\times\log_2\frac{\sqrt{f_1\sim 1}\sim\sqrt{f_2\sim 1}}{f_1\sim f_2}+[\sqrt{f_1\sim 1}\log_2\sqrt{f_1\sim 1}$$

$$+\sqrt{f_2\sim 1}\log_2\sqrt{f_2\sim 1}]\Big]$$

で与えられる．

5. あとがき

天気の確率 A, C とエントロピー H は $f_1\sim f_2=(f_1\sim 1)\sim(f_2\sim 1)$ を用いて今少し簡略できるが，B, D および F は f_1, f_2 も単独で入っているから不可能である．ともかく，このようにして，天気持続係数をもとにして，他の天気持続性を表わす示標を表現することができ，相互の量的関係が明瞭にされたわけである．

参考文献

1) 渡辺次雄 (1960): 天気の持続性について，天気，7, 207～211.

故河田好敦君をしのんで

都田菊郎　千秋鋭夫　新田　尚

1960年7月22日夕刻，信じがたいことですが，河田君は遂に帰らぬ人になりました．自宅に近い，鵠沼海岸の引地川口で突然の心臓の発作が河田君を襲ったのです．時に28歳――余りに短い生涯でした．河田君は東大数物系大学院気象学教室の将来を嘱された学生として，博士コースの最終年を卒えようとしておられました．家庭には結婚2年余りの最愛の喜久子夫人と誕生後1才の愛嬢敦子さんがあり，よき夫，子ぼんのうな父親として幸福な生活を送っておられたようです．

河田君は学究的な人でしたが，趣味もひろく，中でもダンスは玄人の域に達していました．またベスト・ドレッサーとして，そのスマートさでも他を抜きん出ておりました．

円満な人柄とユーモラスな話しぶりは人を魅了しましたが，その反面で口の悪さは仲々隅におけないものでした．

気象学上一番興味をもった問題は，山をめぐる気流を気象力学的に究明することでした．

即ち，徒来は山に気流が衝突したとき，気柱が縮むという効果は考えられていたのですが，気流が山の両側に分れて廻って行くことは考慮されていなかったのです．この問題を数学的にキチンと解くことは仲々困難な仕事です．後で判ったことですが，彼が亡くなった時より2週間前に，この問題がやっと解けたところだったのです．

彼はこの仕事の他にひそかに "Dead water" の問題を研究していました．つまり，山の下流に水の淀んだところができますが，それはどんな具合にして生ずるかということです．口数の少ない彼はこの "Dead water" を誰にも云わず，コツコツとしらべていました．

その彼が，突然，湘南の海に消えたのです．何か妙な気がします．もっとも，こんなことを云えば，皮肉屋の彼はニヤニヤ笑うことでしょうが．